～～～

木村 謹治（きむら きんじ）

対面リーディングの実際 46

― 消滅危機言語 ―

世界には幾つぐらいの言語があるのでしょうか？　専門家によって諸説がありますが、3,000から8,000ぐらいの言語があるといわれています。数に幅がある理由は、なにをもって１つの言語とみなすかについて意見の違いがあるためです。

例えば日本列島には日本語とアイヌ語がありますが、ここに沖縄の言葉である琉球語を加えて３つと数える人と、琉球語は日本語の方言なので独立した言語とは数えない人がいます。さらに琉球語も１つではなく、琉球諸島にある細かな言語の違いをもっと広く認めて、これを沖縄語・宮古語・八重山語など異なった６つの言語として数えようという立場もあるのです。

そもそも、言語を１つ、２つ、とモノのように数えること自体が現実に合わないのです。言語は生き物で、絶えず変化し、交ざり合ったり消えたり、新しく生まれたりを繰り返してきました。16世紀以降、世界中を人々が移動するようになると、あちこちで知らない言語同士が出会い、お互いを理解するために言葉が交ざり合ってクレオール語と呼ばれる混成言語が自然に生まれました。虹のように変化する言語です。

19世紀になると、誰もが平等に学べる世界共通語をつくろうとして、エスペラント語など人間によって人工言語がつくられた歴史もあります。コンピューターに採用されているプログラム言語も、人工言語の新しい進化の形ととらえる人もいます。一方で、世界の生物種が次々と消えつつあるのと同じように、少数言語もどんどん消えています。シベリアで昔からトナカイを飼って暮らしてきた人々が話すトファ語は、もう数十人の話者しかいません。そしてトファ語が消滅すると、トナカイの生態についての世界のどこよりも詳しい知識も一緒に消えることになるのです。

言語は単なる会話の道具ではありません。それは世界にどれだけ多様な歴史や生活の姿があるかを映しだす鏡なのです。（子供の科学のWebサイトより 要約）

『危機言語Ｑ＆Ａ』というサイトによれば危機言語の問題は、２０世紀も終わりに近づいた１９９０年代から特に注目されはじめました。ある専門家は次のような予測を立てています。まず、21世紀のうちに、今話されている言語のうち20～50%が完全に話し手をなくして消滅します。残る40～75%の言語についても、しだいに子どもたちに話されなくなって危機言語の状態に陥る可能性があります。この予測によれば、今世紀末に「安泰」な言語は現在話されているうちのわずか5～10%、数にして300～600程度でしかないということになります。

この予測には、現在全地球規模で急速に進むグローバリゼーションの潮流が影響しています。言語の消滅は、歴史上たしかに繰り返し起こってきたことです。しかしグローバリゼーションの潮流はかつて人類が経験したことのない速度で、多くの危機言語を消滅へと追いやっています。ここに危機言語の問題が特にいま注目されている理由があります。危機言語の問題は、私たちに突きつけられたきわめて現代的な問題だと言えるでしょう。

消滅危機言語とは話者数が減少傾向にあり、近い将来に話されなくなる可能性が高い言語のこと。他言語での教育を強いる同化政策が原因となるほか、職を得るために自ら主要言語を選択するという理由で少数民族の言語が衰退するケースもあります。

2010年時点のユネスコの集計によると、約2,500ある消滅危機言語のうち、国別で最も多いのはインドの193言語で、ブラジル（178言語）、米国（173言語）と続く。日本でもアイヌ語や八重山語（八重山方言）が消滅の危機にあるとされる。

人口が世界第２位のインドは200以上の言語と1600以上の方言が存在すると言われています。

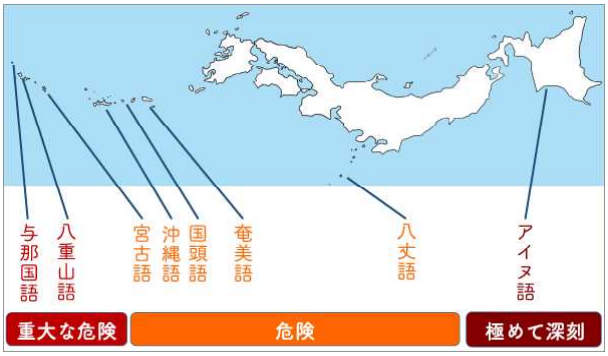
現在、インドの憲法は22の言語を公用語として認定しています。紙幣には、英語とヒンディー語、さらに最低15言語で額面を記されています。

この紙幣の言語もやがて消える日が来るのかもしれません。

文化庁は日本の言語・方言の中には，消滅の危機にあるものがあると指摘しています。

それには，ユネスコ（国連教育科学文化機関）が発表した“Atlas of the World’s Languages in Danger”（第3版）に掲載された8言語・方言や東日本大震災の被災地の方言が該当します。

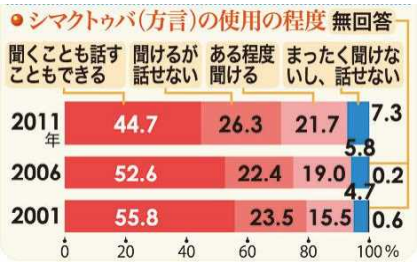
掲載されている8言語・方言とそれぞれの危機の度合いは次のとおりです。



【極めて深刻】アイヌ語
【重大な危機】八重山方言、与那国方言
【危険】八丈方言、奄美方言、国頭方言
沖縄方言、宮古方言

※ユネスコでは「言語」と「方言」を区別せず，全て「言語」で統一しています。

2011年琉球新報社による沖縄県の県民意識調査の結果によると年度ごとにシマクトゥバ（方言、沖縄の言葉）の話せる人は減少しています。



ふるさとの訛なつかし／停車場の人ごみの中に／そを聞きにゆく（石川啄木）

「そ」は「それ」、つまり、ここでは方言を意味します。

「～たい」、「～けん」など方言が聞こえるとホッコリしますね。

ある大学生の感想では、「大学に入って、さまざまな地域からの学生と出会って、みんな違う方言で話すことがとても面白いと思います。地元の人と出会ったら、方言で話すと、お互い同士がすぐ親しくなった気がし、それはたぶん方言の魅力だと思う」との事です。

こんな方言も、かつては方言を撲滅して、そのかわりに標準語だけを使わせようとした時代がありました。

その結果、方言ははずかしいものと人々の心に植え付けたのです。

実際、日本では1970年ごろまで「方言を使わないようにしよう」という教育が行われ、沖縄県や鹿児島県には方言札というものがあって、学校で方言を使うとこれを首から下げさせられることがありました。

そこまでしなくても、「方言を使わないように」という教育は各地で行われました。

このため，この時期に学校教育を受けた人たちは、方言に対してあまりよい感情を持っていません。最近は多少、「方言は大事だ」という意識へ変わってきているようですが、それでもまだ「方言よりも標準語の方がいい」、「方言は必要ない」と考えている人はたくさんいます。

社会の変化とともに地域のことばも変化します。その中で最も大きな変化が方言の共通語化です。

1957年～1964年の『日本言語地図』によると、標準語形使用率が最も高いのは東京の約60％で、東京から離れるに従って標準語形使用率が下がっており、青森県や宮崎県は21.2～22.1％、鹿児島県は 16.1％、沖縄県は3.3％となっていました。

ところが最近、同じ項目を中学生で調査したデータによると、東京や京都からの距離に関係なく、どこでも標準語形使用率が80％を超えていることが見て取れます。

このような歴史とテレビの普及や人口の都市への集中といった生活の変化が重なって、いまやユネスコの発表にある8つの言語だけでなく、各地の言語・方言が消滅の危機に瀕しています。

では、地域の言語を守る意義はあるのでしょうか。これについてよく言われるのは、言語は地域の環境や文化・社会の中で、長い年月をかけて作られてきた。「伝統、文化の継承を支えてきた言葉を失うことは，自然の貴重な教科書を失うことに等しい」（2001年UNEP 閣僚級環境フォーラム、ナイロビでの発言）。

国立国語研究所木部暢子（きべのぶこ）教授は、「ことばというのは文化であり、したがって、ことばの喪失は文化の喪失につながるということ。もう一つは、人間のことばの特色を考えるうえで、ことばの多様性が必要だ」と述べられています。

また、「危機方言は、他の方言ではすでに失われてしまった古代日本語の特徴や、他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く、一地域の方言研究だけでなく、歴史言語学、一般言語学の面でも高い価値を持っている。また、これらの方言では、小さな集落ごとに方言が違っている場合が多く、バリエーションがどのように形成されたか、という点でも注目される。」と述べています。

文化庁も「方言は地域の文化を伝え、地域の豊かな人間関係を担うものであり、美しく豊かな言葉の一要素として位置付けることができる。」と記しています。

言語の多様性が失われつつある背景には、日本が近代化する中で、標準語教育が浸透したのと同時に、かつて地域のコミュニケーションに使われてきた方言の大切さを認識し、それを育んだ地域の伝統や文化と共に守ろうという意識が薄かったことがあげられるのではないでしょうか。アイヌ語以外は島の言葉であり、そもそもの話者数が限定的な上、多くの島で若い人は島外に出てしまい、残った話者が高齢化しているなど社会的な変化も大きいです。

さらに、メディアの発達や、核家族化の影響は大きいですね。やはりおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に暮らしている人の方が方言を使うことが多いということがわかっています。

ここに面白い記事があります。田中ゆかり著の『「方言コスプレ」の時代』（岩波書店）の中に「龍馬」はいつから土佐弁を話すようになったのかという記載があります。

1968年に放映された「竜馬がゆく」で初めて方言がドラマに登場します。この時はまだ「方言指導」というものは行われていませんでしたが、1980年の「獅子の時代」で初めて「方言指導」がクレジットに現れます。

そしてドラマでは、1983年の「おしん」から初の方言指導が行われています。さらに1990年代後半になると、よりきめ細やかな方言指導が行われるようになっていくのです。

今でこそ坂本龍馬といえば土佐弁を話しているイメージが強いと思いますが、小説などの創作物に現れる龍馬は、かつては土佐弁ではな

く、標準語や共通語を話していました。
　戦前から戦後しばらくの小説に出てくる龍馬を見てみると、武士や書生が話すような言葉遣いで描かれていたのです。
　ようやく龍馬が土佐弁を使うようになったのは、1962年に出版された「竜馬がゆく」が最初です。それでも初めは方言が少なく、物語が進むにつれ、徐々に土佐弁が多くなっていったのです。
　創作物に現れる土佐弁の龍馬の影響で、「土佐弁」へのイメージも変わっていきます。
　2010年に放送された大河ドラマ「龍馬伝」は、土佐弁へのイメージを固めるのに一役買いました。「龍馬伝」放送前の調査では、特定のイメージを持たれなかった土佐弁が、放送後の調査では「男らしい」をイメージする方言として浮上してくるのです。
　そして、高知や土佐と関わりない場面でも、「男キャラ」を演じる方言として使われるようになっていきます。（『「方言コスプレ」の時代』）

　方言の本はよくありますが、本を読んでいてもイントネーションは書かれていません。イントネーションは目に見えないからです。「もっこす」や「たい」、「じゃけん」などの方言が目に見える文字で書いてあるだけ。
　しかし、他の県人と話して訛りを感じることからもわかるように、イントネーションも方言に含むべきなのでしょう。
　イントネーションは音声分析にかけて周波数を見れば、高い低いはわかるかもしれませんが、それを見てもイントネーションだというイメージがつかないため、結局目に見えず、方言だということが捉え難いため、研究もなかなか進まないのです。

　例えば英語を学ぶときに発音で意識するべきポイントは以下の4点です。
・単語と単語をくっつけて発音する
・発音しない
・発音を変える
・大事な単語を強く発音する
などです。
　多くの日本人は単語単位で学習しがちですが、実は単語単位ではなく、文章やフレーズの単位で発音やアクセントを勉強した方が効果的です。
　なぜなら発音にはいくつかのルールがあり、それらは単語単位ではなく、文章単位のルールだからです。
　そのルールの１つ、単語と単語をくっつけて発音する事は英語では“Linking sounds”とも言われて、単語と単語をくっつけて発音することがよくあります。例えば以下のような英語です。
実際の英語：I have an appointment at 3pm.ですが、発音では：I havanappointment at 3pm.となり、多くの日本人が聞き取れない原因になっています。

　このように、言語を考える場合は、アクセント、イントネーション、ポーズ、プロミネンス、チェンジオブペース、フレージングなど含めて考えて行かなければなりません。

　コミュニケーションツールとして、英語なり共通の言語があるのは、いいことだと思います。知らない人でも、初対面でも、ある程度の会話ができる。けれど、それは単なるツールです。私たちは、言葉で思考している。言語がなかったら、考えることもできないのではないでしょうか。
　色々なことを考える根本にあるのが言語と言えます。それはコミュニケーションツールとは違う別のものです。それこそ生活に根ざしたものであるはずです。まず生まれてから育つまでにいろんな経験をしていくと同時に、それらをあらわす言葉を耳にして、世界を理解し、自分を形づくっていく。それが、世界共通であるはずがない。だって、文化が違うし、気候も違うし、周りの社会構造も違うし。無理に共通にするなんて非常に恐ろしいことです。

　私たちは、図書を言葉を介して活動するボランティア活動です。ここで言語や方言について、もう一度考えていきませんか。

　地方の放送局は、そこに住む人の言葉をもう少し大事にし、地域の言葉でニュースなど放送すればいいのにと思います。

寄り道・回り道

レポーター：木村（きむら） 謹治（きんじ）

淀屋（よどや）と淀屋橋

【所在地】大阪府大阪市西区靱本町１丁目１８
【行き方】Osaka Metro 御堂筋線 淀屋橋駅すぐ

日本経済新聞にこんな記事が載っていました。『コメ先物取引廃止へ　「本上場」認めず三百年の歴史に幕』　農水省は、大阪堂島商品取引所が国内で唯一扱うコメの先物取引の「本上場」を認めないと堂島取に伝えた。堂島取の約300年の歴史を持つコメ先物は上場廃止になり、すでに成立している取引が完了する来年6月以降は売買できなくなる。

コメの先物取引は、江戸中期の1730年に幕府の公認を受けて大阪・堂島で始まり、「世界的な先物取引の先駆け」として知られています。そして、この制度を支えたのが大坂を代表する最大の豪商・淀屋でした。

淀屋の事業は米市（こめいち）を主とした多角的経営でした。初代の岡本三郎右衛門常安（淀屋常安じょうあん）は、伏見城の造営や淀川の堤防改修において工事の采配を振り、高い土木工事技術を発揮しました。その後、大坂の十三人町（後の大川町、現在の大阪市中央区北浜４丁目）に卜居（ぼくきょ）し「淀屋」と称して材木商を営みました。1609年から1614年に掛けて中之島の開拓を行い、江戸時代から現代まで続く経済の拠点を造ったのです。

２代目の淀屋言當（（げんとう）：通称を三郎右衛門、号を个庵（こあん））は、途絶えていた青物市を元和元年（1616年）に京橋一丁目の淀屋屋敷で再開し、寛永元年（1624年）には「海部堀川」（かいふほりがわ）を開削し、海部堀川の屈折点に造った船着場「永代浜」（現在の靱本町２丁目）に魚の干物を扱う雑喉場（ざこば）市を設立しました。また米価の安定のため米市を設立し、大坂三大市場と呼ばれた青物市、雑喉場市、米市を一手に握り、さらに確固たる地位を築きます。

中之島を開発し、常安請地（うけち）を開き、現在の大阪経済の拠点を開発しました。常安橋-常安町の名がいまに残っています。

歌川広重画「堂島米市の図」

また、淀屋橋は淀屋が米市の利便のために架橋し、橋名もこれに由来します。

江戸時代の経済は米経済といわれ、米取引によって成り立っていました。武士の給料も米です。

しかし、江戸時代初期には米の仲買人が無秩序に各々の判断で米価格を決めていたために適正な価格で取引されることがなかったのです。豊作もあれば不作もありましたが、質が価格に反映されないこともあり、相場の混乱を招いていました。

そこで常安の婿養子であった2代目三郎右衛門こと个庵が、米の取引による混乱を収めるために、質や量を考慮した全国の米相場の基準となる米市設立を江戸幕府に願い出て許されたのでした。

米は現物を持ち運びして取引するのではなく、売買をした証として手形を発行し、その手形を持っていけば米と交換できる仕組みが出来上がったのですが、米相場の安定だけでなく、高く取引をしてもらおうと品質の向上にもつながりました。

やがて現物取引ではなく、その手形自体が売買されるようになりましたが、淀屋の米市でのこういった取引は世界で初めての先物取

引と言われています

米市の取引きは場所を取る米を直接扱わず、米の売買が成立した証拠として手形を受け渡し、手形を受け取った者は手形と米を交換するという事が行われました。それが次第に現物取引でなく、手形の売買に発展する事になり、淀屋の米市で行われた帳合米取引は世界の先物取引の起源とされています。淀屋の米市は２代目の言當、３代目の箇斎、4代目の重當の時代に莫大な富を淀屋にもたらしました。

米市は、元禄10年(1697)に対岸に開拓された堂島新地（現在の堂島浜１丁目）に設立された堂島米市場に移されました。堂島米市場では現物米を扱う正米取引のみが行われ、現物米と交換するための米切手を売買する事は禁じられていましたが、享保初年（1716）頃より始められた帳合米取引が、享保15年（1730）8月13日、幕府より公許され世界初の公設先物取引市場堂島米相場会所となりました。

米市は全国の米相場の基準となり、大坂が「天下の台所」と呼ばれる商都へ発展する事に大きく寄与したとも言われています。

また輸入生糸を扱うための糸割符（いとわっぷ）に、大坂商人も加入できるように長崎奉行と掛け合い、寛永9年（1632年）に、糸割符の加入が認められ海外貿易を始めます。寛永15年（1638年）からは加賀藩主前田利常の意向により加賀米の取扱いが本格化し、その大坂への輸送に際して、日本海から関門海峡と瀬戸内海を経由して大坂に至る西廻り航路を北風（きたかぜ）家の北風彦太郎と共に担い、北前船の先鞭と成りました。

常安は大阪冬の陣でいち早く徳川方への支持を表明して徳川家康に茶臼山の陣を、徳川秀忠に岡山の陣を提供することで、野営する徳川方の兵への酒や食料の供給を一手に引き受け利益を得ました。

また、夏の陣では戦の後始末を願い出て、戦没者の供養や大量に遺された武具や武器、馬具等の処分でも大きな利益を得ました。

淀屋の総資産は約20億両（現在の貨幣価値に換算すると約200兆円）といわれ、初代、2代目は商売に熱心な一方、江戸幕府とも緊密な関係を築いて富を築いてきました。

3代目以降は商売に無頓着どころか、無関心、そして番頭や手代に任せっきりとなってしまいました。

5代目の淀屋辰五郎のときにはわずか10歳で当主となったことから、周囲は子供に遊所通いを覚えさせ、自分たちもその相伴に与ろうと群がります。1年半で1万貫（現在の価値では約100億円）を遊興費に使ったといわれています。

結局、5代目で闕所（けっしょ）処分という全財産の没収がなされ、所払いとなりました。

没収された財産は金が12万両（約90億）、銀が12万5千貫（約1,562億5千万円）、淀屋の敷地2万坪（約6万6千㎡）、建物面積1万坪（約3万3千㎡）、その他にも不動産（土蔵や貸家が数千軒）や材木、船舶（数百隻）、書画や骨董、茶器、宝飾、美術工芸品など目眩がするような単位の資産が全て没収されました。

また、この他に諸大名への貸付金が銀1億貫（約125兆円）ということですから、淀屋の資産は総額で125兆円を超える空前絶後の豪商でした。

全財産の没収により、諸大名、公家の借金は全て帳消し、幕府が潤ったことは言うまでもありません。

※多くの部分をフリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』を参考にしました。

淀屋の碑は淀屋橋駅３番出口を出て、信号を北に渡り、左手にあります。

淀屋一族の墓は大阪市中央区谷町九丁目の大仙寺にあります。手前から４代目重當、初代常安、２代目言當（个庵）の墓。

リモートでの話し方のコツ

サービス部　福田（ふくだ） 直樹（なおき）

新型コロナウイルス感染症のため、当初の予想以上の長期間、対面リーディングができない状況が続いています。

緊急事態宣言が解除されて対面が再開できるようになっても、当面はZoomを使ってのリモート形式の対面となります。

そこで今回はリモートでの画面越しに、相手に内容を伝わりやすくするためのコツをご紹介します。

①いつもより声のトーンを高めにする

オンラインではマイクを通す分、低い声に聞こえます。低くこもった声だと普段以上に聞き取りにくくなってしまいます。そのため気持ち高めの声で話すと聞き取りやすくなります。

②口角を上げて話す

口角を少し上げると、自然と明るくエネルギーのある表情になります。喉も開きやすくなるため、大きく通る声も出しやすくなります。

③姿勢を整える

緊張すると体を左右に揺らしながら話したり、猫背気味に話したりする方もおられると思います。これらの姿勢で話すと、こもった小さな声になりがちです。

姿勢のポイントとして、座って話す場合は鎖骨の高さを真上に引き上げることを意識しましょう。それだけで背筋が自然に伸びて、声が出やすくなります。また、内臓を圧迫しない姿勢なので、気分も上向きになり、緊張もほぐれます。

④落ち着いた口調でゆっくりと話す

オンラインでは早口になる方が多いそうです。早口だと滑舌が悪く感じたり、聞き取りにくくなりがちです。ひと言ひと言をはっきり丁寧に話しましょう。

番外：発言の話始めと話終わりを意識する

対面では本を読むだけでなく、世間話など会話も多くあると思います。会話の際には相手の話を最後まで聞き取り、間を取ってから話し始めましょう。一瞬間を置くことで、相手は話をきちんと聞いてくれた上で伝えようとしている、と受け取ることができます。

以上は一般的なリモートでの話し方のコツとして紹介されているものです。ただ、対面では図書や資料を読むためどうしても俯いた姿勢になったり、話すスピードも利用者の希望に合わせて速くするケースも考えられます。

リモートでは同室で顔を合わせて対面を行うのとは感覚が異なるのは当然です。今回の内容を少しでも実際の対面の場での読み方に役立てていただければと思います。

※このページは以下のHPの記事を参考・引用しました。

ボイス＆メンタルトレーニングスクール「アマートムジカ」
・Web会議での話し方のコツ５選
https://amatomusica.com/web-mtg

漢字あれこれ（その5）

対面リーディングボランティア　澤井（さわい） 稔（みのる）

その①　一字音読み

漢字には時々、音読みか訓読みかどちらで読むか、迷う場合が有ります。例えば「等」は好みによって音訓両読みがあるわけですが、どちらで読むか紛らわしい時が有ります。「とう」と音読みにするか、「など」と訓読みにするか、人によって随分違います。意味が違うというのではなく、調子が狂うというか、ヘンな感じがするのです。「空を切る」を「そらをきる」では具合が悪いですし、「大それた」を「おおそれた」と読まれては気が抜けます。

それでは、音読み一字の漢字の例を挙げて見てみましょう。

①指呼の間=「しこのカン」と読みます。呼べば答えが返ってくるぐらいの短い距離。
②素のままの美しさ=「スのままの美しさ」。「体をつくる素」という場合は「モト」。
③頭が高い=「ズが高い」。「水戸黄門」の決め台詞。
④先を越される=「サキ」と読む人もいるでしょうが、「セン」の方が歯切れが良い感じがします。
⑤群を抜く=「グンを抜く」。「抜群」を漢文読みしたもののようです。
⑥天馬空を行く=「てんばクウを行く」。中国の伝説上の馬が空中を飛ぶように自由奔放に行動するたとえ。
⑦隆盛野に下る=「たかもりヤに下る」。政府の官職を辞めて民間の人になること。「下野」(げや)の漢文読みが由来でしょうか。
⑧根を詰める=「コンを詰める」。気力を振り絞る事。
⑨真に迫る=「シンに迫る」。「真に受ける」の場合は「マ」。
⑩端を発する=「タンを発する」。物事が始まる事。「発端」(ほったん)の漢文読み。
⑪斜に構えた印象=「シャに構えた印象」。少し気取った態度。「斜向かい」の場合は「ハス向かい」。
⑫巻をおく間もない=「カンをおくまもない」。「巻」は昔の書物のことで、書物が面白くて止められないという意味です。
⑬芸の粋を披露=「芸のスイを披露」。混じりけがなく、すぐれたいいものを披露する事。
⑭左の通り=「サの通り」。
⑮我を通す=「ガを通す」。
⑯陰にこもった=「インにこもった」。
⑰他に類を見ない=「他にルイを見ない」。
⑱同じ伝で=「同じデンで」。
⑲剣が峰に立つ=「ケンが峰に立つ」。
⑳一方の雄=「一方のユウ」

その②　一字訓読み

「飲み代」を「飲みしろ」と言うのはちょっと古い感じで、「身代金」ぐらいが健在でしょうか。又「蛇の道は蛇」と言うのも残っています。それでは訓読み一字の漢字を見てみましょう。

①鎖の環=「鎖のワ」。
②良妻賢母の鑑=「良妻賢母のカガミ」。鏡は物質のかがみのこと。「鑑」は手

本・模範。
③生きる証=「生きるアカシ」。
④悲しい性=「悲しいサガ」。持って生まれた性質。
⑤優柔不断な質=「優柔不断なタチ」。物の性質だと「シツ」となることが多いようです。
⑥実のある話=「ミのある話」。内実、中身。「実のある人」の場合は「ジツ」で誠実であること。
⑦高貴な貌＝「高貴なカオ」。美貌、容貌の意味。相貌、外貌の意味の場合は「カタチ」。
⑧不逞の輩=「ふていのヤカラ」。少しけなしたニュアンスがあります。
⑨真に受ける=「マに受ける」。野球解説では「シン」も有りそうです。
⑩徒になる=「アダになる」。甲斐がないことです。
⑪立場を異にする=「立場をコトにする」。「縁は異なもの」の場合は「イ」です。
⑫次のような件がある=「次のようなクダリがある」。文章の一部分のことです。「件の」と言う場合は「クダンの」となり、一般的な常用は「ケン」です。
⑬三行半=「みくだりはん」。離縁状。
⑭なす術がない=「なすスベがない」。
⑮要になる部分=「カナメになる部分」。
⑯質素を宗として=「質素をムネとして」。
⑰雅の心=「ミヤビの心」。
⑱刺と毒=「トゲと毒」。
⑲匠の技術=「タクミの技術」。
⑳面を伏せる=「オモテを伏せる」。

漢字の読みの難しさの一つに、文章文脈の中での使い方によって「音読み」「訓読み」の微妙な使い分けが生じるという事が有ります。単純ですが何度もその表現に慣れるというのもおぼえるコツだと思います。幅広く読みの世界を広げていきましょう。

おしらせ

・「対面リーディングボランティアの集い」について

例年11月に行ってきました「対面リーディングボランティアの集い」ですが、新型コロナウイルス感染防止のため、昨年に続いて本年も中止と致します。ボランティアさん同士の交流ができる貴重な場であり中止は非常に残念ですが、来年こそ開催できることを願いたいと思います。

・「エンジョイ！グッズサロン20周年企画　オンライントークイベント」を開催

当館では、10月９日(土)・10日(日)にZoomミーティングを使い、話題の機器や用具、アプリなどの情報を盛り込んだトークイベントを開催します。５つのテーマを設け、ゲストを迎えて最新情報の提供と双方向の意見交換を行います。また、その様子はYoutubeライブでもご覧頂けます。詳しくは当館ホームページ内の特設サイトをご参照下さい。

東京オリンピック・パラリンピックが終幕。開催の是非は別として、選手たちの真剣勝負は見応えがありました。パラスポーツが根付く機会になると良いですね。(F)

日本ライトハウス 情報文化センター
550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2
06-6136-7704（対面専用）
06-6441-0039（サービス部）